

新開さんの「中国論」(2023.11.25 関西ルネ研報告)を読んで

大谷美芳(2023.12.05)

報告全体は7章構成。主に結論の第7章「中国は資本主義か社会主義か」の、そのまた結論「私見」にコメントしたい。その過程で第6章「社会主義とは」にもコメントしたい。

「①社会主義である。②社会主義ではあるが改革さるべきそれである。③国家資本主義である。④国家資本主義であるがそこを通して社会主義へ移行する。」(p1)

最初に、『中国は社会主義か』(かもがわ出版)を参考に、現在の中国論における4つの立場がこう紹介されている。新開さんは②と③の間で結論は保留、と理解しました。私は③です。④はよさそうだが特異な自動移行論で論外。

「中国が資本主義であることは明らか。私企業が80%をしめ国有企業も株式会社である。労働市場があり資本一賃労働関係がある。つまり生産様式として資本主義であることは何の疑いもない。」(p8)

「しかし、社会体制として資本主義か否かは経済だけでは決まらない。過渡期では資本主義を含めいくつかのウクライドが存在しうる。どの階級が国家権力を掌握しているかが要である。」(p9)

では、国家権力はどの階級が握っていると言うのですか？ 過渡期と言っていると理解しました。であれば、プロレタリア階級独裁。国家権力はプロレタリア階級が握っていて、経済は世界第2位の資本主義大国、そんなことが半世紀近くも続く。ありえません。経済だけでは決まらないと言いながら、政治の総括が全くありません。

(1)中国論 現在の社会は官僚制国家資本主義 国家は官僚ブルジョア階級の独裁

1949年の革命は「新民主主義革命」でした。民族解放と民主主義のブルジョア革命だが、社会主義革命を最終目的とするプロレタリア階級=共産党がそれを指導した。成立した国家は、プロレタリア階級独裁(社会主義的独裁)ではなく、労農同盟を基礎とした人民民主主義独裁でした(ロシア革命の「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」)。

・革命の推移 社会主義か資本主義か 2つの道の闘争 長期の革命と反革命

その下で、1950年代前半に国有化・工業化と農業集団化が実行された。国家資本主義を通して社会主義を実現する。資本主義が遅れた国でもプロレタリア階級が国家権力を使って工業化して社会主義を実現する。集団化で農民をプロレタリアに改造し、国家はプロレタリア階級独裁に転化する。こう展望されました。しかし、そうはならなかった。

路線闘争が起き長く続いた。毛沢東が指導し劉少奇・鄧小平を打倒した文化大革命。それが破綻しそれを否定的に総括し鄧が指導した改革開放。最後に天安門事件。

路線闘争の中心は、国家所有と集団所有の経済の管理でした。官僚と官僚主義が登場し、官僚制国家資本主義へ向かう。これが劉・鄧の路線。生産力主義。毛沢東は大衆路線、官僚主義に反対する闘争を組織した(「プロレタリア階級独裁の下での継続革命論」)。

文化大革命は官僚制国家資本主義に反対した社会主義革命でした。しかし、官僚を統制し、やがて取って代わって大衆の自主的に管理する、こういう持続的なプロレタリア階級

の階級闘争を組織できず、破綻した。そこで鄧小平が「改革開放」で勝利。「計画経済」=統制経済から転換する、市場経済だが国家所有を根幹に国家が管理する、農民は集団所有を廃止して市場経済で組織する、そういう官僚制国家資本主義でした(ソ連崩壊の総括)。

同時期、ベトナムも民族解放闘争に勝利後、「ドイモイ」(「刷新」)で官僚制国家資本主義化した。また、韓国・台湾などが先頭を切って、アジアで、もう一つの国家資本主義=開発独裁をテコに、工業化と資本主義が進行しました。

・ 国家の変遷 階級的性格の変化は文化大革命と天安門事件

①1949年に成立した人民民主主義独裁の後、②文化大革命で1968年に革命委員会が全国的に成立した。理屈ではプロレタリア階級独裁ですが、実際は官僚機構である人民解放軍に全面的に依存し極めて歪でした。しかも不安定で短命。①に含めてもいい。

③文革破綻後、鄧小平の主導権の下、華国鋒を更迭して成立した胡耀邦と趙紫陽の時期、革命委員会が廃止され人民民主主義独裁の体制が復活しました。今度は、プロレタリア階級ではなく、ブルジョア階級が主導した(毛ではなく鄧)。胡と趙の立場は民主主義と言えるでしょう。その下、官僚主義と官僚制国家資本主義は進んだ。

それに対して、1989年の天安門事件が起きた。都市の小ブルジョア階級とりわけ学生が中心だが、人民の民主化闘争と言えるでしょう。それを鄧の主導権の下、人民解放軍を使って弾圧し、弾圧を肯定的に総括した。こうして始まった江沢民の時期からが、④官僚ブルジョア階級の独裁(共産党独裁=全体主義)である。③は④に含めてもいいでしょう。

そうするとこう整理されます。プロレタリア階級が主導する人民民主主義独裁→革命=社会主義と反革命=資本主義の闘争→反革命の勝利で官僚ブルジョア階級独裁。

同時期、ソ連は民主化闘争の勝利で崩壊した。また、韓国と台湾は、開発独裁(権威主義)に対する人民の民主化闘争が勝利し、ブルジョア民主主義体制が成立した。

(2)ソ連論 スターリン主義は官僚制国家資本主義 ソ連崩壊は帝国主義の崩壊

「ロシア革命、中国革命をプロレタリア革命と認めるなら(僕は認める立場)、体制として(国家)資本主義説をとるとすれば、どの時点で『反革命』(道徳的意味を全く抜いて社会科学的に)が生じたか。ロシアの場合は明らかに1991年の崩壊によって体制転換したことは当事者をはじめ誰の目にも明らか(スターリニズムを国家資本主義と考える人もいるが、僕はトロツキーに倣って『歪曲された労働者国家』説)。」(p9)

1921年の「NEP」が重要です。10月革命つまりプロレタリア階級独裁と社会主義革命は、帝国主義戦争の危機の中でロシアの現実を飛び越え、都市だけに成立した。内戦勝利後、農村と全国を統治するには現実に合わせ、「戦時共産主義」から「NEP」へ転換した。農民を市場経済で組織する。国家の実質は「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」へ、戦略的な退却でした。

その下、1920年代後半～30年代前半に、工業化・国有化と農業集団化を実行したが、実際は農民を収奪する資本の本源蓄積でした。管理をテコに官僚と官僚主義が台頭し、官僚制国家資本主義化しました。同時に、トロツキー派とブハーリン派に対する党内闘争、およびモスクワ裁判など大粛清、これで官僚ブルジョア階級独裁=全体主義が確立した。

それがスターリン主義、それが反革命です。レーニン「最後の闘争」はあるが、毛沢東の

ような革命路線はまだ登場しなかった。

ソ連崩壊は、反革命ではありません。社会主義の崩壊ではなく、帝国主義の崩壊です(第二次大戦前後に帝国主義化)。東欧～中央アジアと国内の被抑圧民族と従属国による、解放と独立の革命、およびロシア人民の民主化闘争です(勝利したがブルジョア民主主義は長続きせず権威主義=プーチン体制が成立)。

(3)マルクス・レーニン主義論 破綻した 文化大革命と毛沢東思想の破綻が集中的表現

マルクス・レーニン主義は、資本主義における生産力と生産関係の矛盾、およびプロレタリア階級のブルジョア階級に対する階級闘争で社会主義革命を実現する。普遍的であり、原理的な意味では、現在でも依然として正しく有効な理論である。

しかし、直面した実践は特殊でした。直接的には社会主義革命ではなかった。1848年のドイツ革命も(ここでマルクス主義・『共産党宣言』が生まれた)、ロシア革命も中国革命も、全てブルジョア革命でした。それをプロレタリア階級のヘゲモニーでプロレタリア革命へ連続的に発展させ、資本主義の発展を経ないで社会主義を実現しようとした。二段階連続革命論。哲学的には弁証法的唯物論の主観的能動性。

しかし、破綻しました。ドイツ革命だけでなく、ロシア革命も中国革命も、全てブルジョア革命に終わり、資本主義化した。中国は1970年代、ベトナムは80年代。社会主義化の主観的能動性が、資本主義化の唯物論的必然性に包摂された(プロレタリア階級は最後の勝利までは敗北)。毛沢東思想においては観念論の主観主義に転落してしまった(官僚主義に対する闘争が最後は「私心と闘う」など)。

中国文化大革命と毛沢東思想の破綻は、マルクス・レーニン主義の破綻である。

(4)社会主義論は不明ですが官僚制国家資本主義批判が改良主義になっています

第6章「社会主義とは」で、「スターリン・毛沢東の社会主義論の誤り」は「社会主義=私的所有の廃止論」、と言われている。国有化と集団化、確かにスターリンはそれを社会主義の実現とした。しかし、毛沢東はそれでも資本主義化すると文化大革命を実行した。

真反対の二人を同一視して批判する？ ありえないでしょう。最も重要な官僚主義の問題でも、官僚制国家を、スターリンは打ち固め、毛沢東は打ち倒した、これも真逆です。

・社会主義とは生産関係の全面的な革命 プロレタリア階級独裁の下での継続革命

「例えば国有企業と労働者の関係で強蓄積のために労働分配率が不当に低くかったり、集団農場での農民の収入=国家への農作物売渡価格が生産費にも及ばない(彼らはかろうじて自留地で飢えをしのぐ)といった(生産)関係の中では、たとえ法的に私的所有がなくなったとしてもそれは生産関係総体の変革ではない。」(p6)

「労働分配率」=賃金は低い(とりわけ原始蓄積では)。でも、だから社会主義ではないのですか。では、賃金が上がれば社会主義ですか。そうではない。これでは官僚制国家資本主義に対する民主主義的改良主義です。中心問題は消費手段の分配ではない。

生産関係は3側面で成り立つ。①生産手段の所有制、②労働指揮関係、③分配制。ロシアでは労農独裁の下、中国では人民連合独裁の下、①生産手段の国家所有や集団所有が実現された。しかし、官僚が、②労働を指揮し、それ以上に③生産物の分配制を支配する。

再生産・拡大再生産のための蓄積、言わば生産手段の分配、それを支配する。

$$4000c + 1000v + 1000m = 6000 \quad 1000m \rightarrow 500(\text{消費}) + 500(\text{蓄積})$$

$$500 \rightarrow 400c + 100v \quad (4000+400)c + (1000+100)v + 1100m = 6600$$

資本主義ではこれを資本家がやるが、それを官僚がやった。そこから労働者は排除されている。こうして、官僚が経済を管理してブルジョア階級に転化し、国家所有と集団所有は官僚制国家資本主義に転化し、国家は官僚ブルジョア階級独裁に転化しました。

国家所有と集団所有を実現しても、経済を労働者階級が管理しなくてはならない。しかし、すぐにはできない。官僚を統制し、やがて取って代わって自主的大衆的に管理する、そういう持久的な階級闘争が必要になる。それがプロレタリア階級独裁と、その下での継続革命であり、それが社会主義でしょう。

中国文化大革命はそれができなかった。官僚制国家資本主義を生産関係の全面で批判できなかった。四人組は、官僚主義の根拠を「労働に応じた分配」=「ブルジョア的権利」に求め（やはり消費手段の分配）、「私心と闘う」など、観念論の主観主義に転落しました。

(5) トロツキズムの清算 「補足的第二政治革命論」も清算 実際は改良主義

「(国家)資本主義か、『歪曲された労働者国家』=社会主義かの最終判断は中国共産党が完全に变质したか否かである。前者なら全面的社会・政治革命が必要であり、後者ならトロツキーのいう『第二の補足的政治革命』が必要である。」(p9)

で、どちらですか？ 歪曲でも労働者国家ならプロレタリア階級独裁。国家権力のある階級から他の階級に移す政治革命は必要ありません。論理矛盾です。

「補足的第二政治革命論」を実践したのは、皮肉にもスターリン系でした。ソ連のゴルバチョフと中国の胡耀邦・趙紫陽。結果は、人民に、国家独立・民族解放の革命や民主化の闘争に乗り越えられた(ソ連崩壊と天安門事件)。かつてのソ連や現在の中国に対して、「補足的第二政治革命論」の実際は改良主義でした。やはり必要なのは革命です。共産党に代わる革命党とプロレタリア階級独裁、こういう社会主義革命。

また、社会主義論において、トロツキズムは官僚制国家資本主義のスターリン主義と同質ではないでしょうか(プレオブラジェンスキーの「社会主義原始蓄積論」)。逆に、ブハーリン(「亀の歩み」)は、本当に富農を代表したのか。実は工業化と農業集団化が農民の収奪と資本の原始蓄積になるのに反対したのではないのか。

トロツキズムは一国社会主義を否定した世界革命論。しかし、社会主義はプロレタリア階級独裁の経済的土台、一国でプロレタリア階級独裁が可能で必要なら、社会主義も可能で必要、それを否定した世界革命論は空論です。スターリンはロシアの工業化に集中した現実主義(社会主義ではなく官僚制国家資本主義だが)、トロツキーの敗北は当然です。

(6) 配付資料・八木沢二郎「反スタ主義の止揚と現代革命」(1971年『序章』)を読んで

「民族解放—社会主義」が強調されている。20世紀にそういう一時代がありました。ロシア革命・中国革命・民族解放闘争。先発資本主義が帝国主義化し、イギリス覇権にドイツが挑戦し(二度の世界大戦)、覇権はアメリカに移行したが、その対極に存在しました。中心は中国革命、アジア・アフリカ・中南米の民族解放闘争を支援した(ソ連の支援は対米・帝国主義的覇権闘争)。しかし、その時代は終わった。そういうコメントがほしい。

・「民族解放—社会主義」が反対物へ転化 後発資本主義・帝国主義へ転化

二つ(双生児)の国家資本主義(開発独裁と官僚制国家資本主義)によって、アジアで後発資本主義が発展している。アフリカが続く。グローバリズムは、「北」による資本輸出=資本主義の移植よりも、それを利用した(国家資本主義)、「南」による資本主義の内在的な発展です。ここが重要です。資本主義の不平等発展が貫徹し、世界史的大転換です。

これが 20 世紀の終盤に起き、21 世紀へ至った。その中の一つ、中国が後発帝国主義として登場し、先発帝国主義=アメリカに挑戦している(ソ連が先に挑戦して敗北・崩壊)。中国・ロシアと米国・西欧・日本の覇権闘争です。それに応じて、被抑圧民族の帝国主義に対する反覇権闘争も、反米から、反米(欧日)と反中(ロ)に変わる。

こういう転換の認識がないと、例えばウクライナ戦争論で無理やりに反米闘争論をやる。対ロシアの反侵略・祖国防衛戦争として支持すべきなのに、逆に米国・NATO の帝国主義的代理戦争とみなして反対する、こういうことになっています。

・20 世紀論と 21 世紀論 破綻を認識して総括する 社会主義を「ルネサンス」する

転換は広く深い。「南」は、勃興する「新世界」、工業化と資本主義の成長、労働者階級の増大と階級闘争の発展。「北」は、衰退し没落する「旧世界」、工業的空洞化と金融化、労働者階級は大分裂(経済的には上下に政治的には左右に)。レーニンが『帝国主義論』で示唆した「腐朽性」と「寄生性」の全面化でしょう。

世界資本主義総体は格差の拡大と貧困の蓄積、および地球自然環境の破壊。それは、資本主義の生産関係による人間と自然つまり生産力の破壊、と言える。危機も広く深い。社会主義革命の条件が成熟しているが、広く深い内容、21 世紀の新しい社会主義が必要である。「南」における労働者階級の階級闘争の発展は革命に向かうのか。「北」における労働者階級の大分裂は革命に向け統一できるのか。社会主義の前途は遼遠でしょう。

世界史的大転換を認識しないと展望は切り拓けないでしょう。また、その大転換の認識は、1970・80 年代における中国革命とマルクス・レーニン主義と国際共産主義運動の破綻を認めて総括しないと、出てこないでしょう。(おわり)